

はなからうか。  
本書がその目的のために、広く読まれ、高  
校や大学のサークルやゼミのテキストとして  
用いられることを望んでやまない。

### 現代思想の隘路を突破する鍵 『意味と生命』

青土社  
1800円

栗本 慎一郎著

(評者) 社会学 橋爪 大三郎

「意味」と「生命」。この二つは「と」で繋がれているが、実態は異なるという。マイケル・ポランニーの「層の理論」によれば、そう言えるらしい。著者栗本氏は、この書で、「暗黙知理論」として知られるポランニーの説を、そのもう数歩先へ進めて、現代思想の一角に新しい地歩を築こうとする。けっして読みやすい本ではない。ヴィトゲンシュタイン、ホフスタッター、メルロ・ポンティ、プリゴジンなど、哲学・認知科学・現象学・散逸理論のおおどころを、それなりに読みこなして当たり前、という書き方だ。話題はあちこちに飛び、盛り沢山である。ただその発想は一貫しており、全編「層の理論」の応用問題になっている。そこでこの「層の理論」を、簡単にでも押

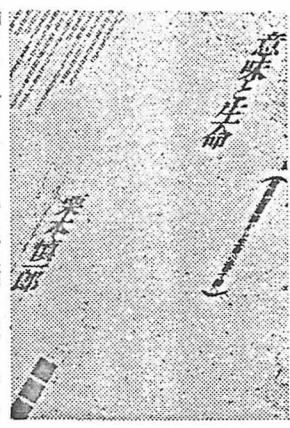
さえておく必要がある。  
まず、「層の理論」の対極にあるのが、アトミズム(あるいは還元主義)である(その特徴は、閉鎖的な言語体系だとされる)。アトミズムでは、部分が全体を離れても実体として存在し、それが機械的に集まって全体を構成すると考える(決定論)。それに対して、「層の理論」では、なにが部分でなにが全体かは相対的だ。部分は、全体のなかにあるから実体のようにみえるだけで、実はもっと小さなべつの全体なのかもしれない。全体にしても、もっと大きななかの部分なのかもしれない。こうして、部分/全体の関係は、いれど構造みたらいになって、上下に限りなく続いでいく。  
「層の理論」がこんなものだ(はたして「理

旧刊・旧著

### 『職業としての学問』

マックス・ウェーバー  
日本暗号協会会長 長田 順行

だれにも思い出に残るような一冊の本に出会うことがあるだろう。私にとってそれが本書である。初めに購入したのは、サイド・ラインや書き込みが多くなって、今では新旧の二冊が手元にある。  
ウェーバー(一八六四―一九二〇)が、有名なドイツの社会学者であったことは、改めて言うまでもあるまい。この偉大な学者の学問的な業績について、私はそれをよく理解しているわけではない。しかし、本書はミュンヘン大学で学生を相手に講演した内容であって、予備知識がなくても分かりやすい。  
ここでウェーバーが何を言おうとしているかは、訳者の序文にまとめてあるので、それを読むとよい。  
ところで、かつて産経新聞の正論欄に(昭五十三・五・十五)、会田雄次氏は



「論か?」とすると、私の知るかぎり、ヘーゲルの弁証法によく似ているようだ。ただし「ヘーゲルの場合、底(有)と天井(絶対精神)があるが、ポランニーはそのような限界を考えない。極微から宇宙大にまで連なる層の連鎖を想定する。こういうことを察するのが、暗黙知である。  
自然科学で業績をおさめたポランニーは、これも暗黙知のおかげだというわけで、それを一般化する。彼によれば、原子・分子……とたどられた生命進化のプロセスの(当面)最高の所産は、人間の精神である。しかしそれも、もっと大きな全体(宇宙的生命)の一部であろうという。彼はそこに、未発見の法則を想定する。私はこれは、ユダヤ神秘思想の直系だなあ、と思うのだが、栗本氏はそう考えない。心身問題、生命科学、大統一

欧知識主義を排して何度も精読せねば判るまい(あとがき)とあるけれども、難解なのは論旨に無理があるせいもあるように思う。  
本書はよく売れたそうだが、通読できずに挫折した人が多いかもしれない。そういう人は全体のイメージを掴むのに、たとえば第三

理論の隘路を突破する鍵であると考え。  
この書は、栗本氏の楽屋裏を公開するかたちになっている。これを信ずるなら、栗本氏は「魔法使いの弟子」である。彼によれば、あらゆる現代思想家のなかで、ポランニーがいちばん進んでおり、ヴィトゲンシュタインがそれに次ぎ、……というランクがある。近代は、アトミズム(還元主義)の言説が支配する時代だった。それがいま、終わろうとしている。ポランニーの「層の理論」を援用するなら、自然科学の難問だろうと、哲学、社会科学の難問だろうと、たちどころに解決の方針がみつかるに違いない。この書全体が、そういうことを熱心にのべてやまない。  
マイケル・ポランニーが今世紀の傑出した知性であることは確かだろう。しかし、私は栗本氏のように楽観することができない。疑い深い私は、なぜ栗本氏がこうも先走って信じやすいのだろう、などと考えてしまう。本書三十二頁によれば、やや出版を急いだというから、本当はもっと説得力のある議論なのかもしれない。ただ少なくとも今回読んだ限りでは、無条件に共鳴できるところが期待したほど多くなかった。残念なことである。  
「本書はかなり難解である……旧来の俗流西

章第三節の最初のところを読むといえども、近代はまだ始まったばかりで、(この書のような)少々の揺さぶりではびくとももしない、と私は思う。もう少し地味でも、緻密な議論のほうがこたえるはずだ。

「性懲りのない国民性、精神平和主義を排す、暗号解読など現実的努力を」といった見出しの一文を寄せられた。私の専門は暗号であるが、それはことばとの関連においてはメタフィジカルなものであり、技術的な側面からは経験科学だと思ふ。  
そこで私は、国家レベルの暗号の研究にたずさわる人々に対しては、本書の次の言葉を引用して語を締めくくりにしている。  
「今日何か実際に学問上の仕事を完成したという誇は、独り自己の専門に閉じこもることによってのみえられるのである。これは単に外的条件としてそうであるばかりではない。心構の上から言ってもそうなのである。〈中略〉だからして、いわば自らめかくしを着けることのできなない人や、また自己の全心を打込んで〈中略〉夢中になるといったようなことのできなない人は、まず学問には縁遠い人である」  
これは、その一例に過ぎないが、一九一九年に語られたその内容は、今日でもわれわれに多くのことを教えてくれる。  
(尾高邦雄訳、岩波文庫、一九五一年)

MYSTERY  
ひところ翻訳エンタテイメント界を席捲した感のあったホラー小説ブームも、最近  
は下火になってきたようである。帝王ステ  
イゲン・ファンク(鼠目目をつつすが、